

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20592636

研究課題名（和文） 乳幼児を持つ親の養育肯定感情を高める子育て支援プログラムの検討

研究課題名（英文） Improvement of a support program for mothers to increase to feeling about parent's positive affection of child-rearing

研究代表者

都筑 千景（TSUZUKI CHIKAGE）

大阪市立大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：00364034

研究成果の概要（和文）：

本研究は、研究者が現在までに進めてきた親の養育を肯定する感情に関する研究を発展させ、養育肯定感情尺度の検証およびこの尺度を子育て支援プログラムの評価に適用し、その活用可能性を検討したものである。研究の結果、作成した養育肯定感尺度（Positive Affection of Child - Rearing Scale: PACS）の信頼性・妥当性と、PACS が自治体における子育て支援事業の評価に活用可能であることを確認した。また子育て支援プログラムの実施評価から今後のプログラム内容について検討した。

研究成果の概要（英文）：

This study was developed through the former research on feeling about parent's positive affection of child-rearing. In this study, the Positive Affection of Child - Rearing Scale (PACS) was used to evaluate a support group program for mothers managed by a local government. The purpose of the study was to verify the scale and to identify whether it is possible to use for the evaluation.

As a result of this study, the reliability and validity of the PACS was confirmed, and it was suggested that the PACS was useful to evaluate the support group program for mothers managed by a local government. Furthermore, the contents of the support program for mothers in the future were discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：子育て支援、尺度開発、母子保健事業、評価、養育肯定感

## 1. 研究開始当初の背景

少子化や核家族化など時代背景や社会状況が変化中、育児不安の増加、子ども虐

待の増加など子育てに関するさまざまな問題は増加の一途をたどっている。国の対策としては、健やか親子 21 のなかで子どもの心

の安らかな発達の促進と育児不安の軽減がうたわれており、これに基づいて多くの自治体で子育て支援に関する施策が実施されている。

現在、地域保健の現場においては子ども虐待や不適切な育児を未然に防止すべく、広く一般の親やリスクを持つ人などさまざまな状態にある対象に対して子育て支援を実施している。しかしながら、どの程度効果があるのかといった評価に関する論議はあまりなされていない。特に一般の親に対する自治体の実践に対する評価は難しい状況にあると考えられる。それは、既に問題が顕在化している対象であれば、リスクの低下や子ども虐待の減少などが結果として得られる可能性が高いが、地域保健の現場で対象とされる多くが重症な状態になる前の段階、すなわち予防的な関わりが多いため、長期的にまた多角的に評価しないと効果が見えにくいと考えられるからである。さらに効果が見えにくいことにより、支援内容や方法が従来のままでよいのか戸惑う声も聞かれ、現場では試行錯誤が続けられていることが推察される。

その中で研究者は、近年ソーシャルワークの分野において注目されている strengths 視点(小松 1996)に着目し研究を進めてきた。strengths 視点は従来までのクライアントの対処能力を妨げる病理への探求から、各人が持っている strengths—多元的な可能性、能力、適応力、現に現れているだけでなく潜められている資源や強さ—に目を向けた考え方である。現在までに育児の持つ力、親の思いだけでなく育児そのものが強みや資源となりうる可能性など広くポジティブな側面を明らかにし、測定するための尺度として暫定版養育肯定感情尺度を開発した。この尺度について、実際のプログラム評価に適用できるか検証すること、またそれにより自治体における子育て支援プログラムの内容やあり方について検討していくこととした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現在までに開発した暫定的養育肯定感尺度を検証すること、子育て支援プログラム評価への活用可能性を探ること、子育てプログラムの評価を通じてプログラムの検討を行うことである。

## 3. 研究の方法

### (1) 暫定版養育肯定感尺度の検証

前年度作成の暫定版養育肯定感尺度開発に収集したデータの再分析を行い、養育肯定感尺度 (PACS) を作成した。

### (2) 尺度の子育て支援プログラムへの適用とプログラム評価

①研究実施期間を通じてA市で実施してい

る子育て支援グループプログラムに研究者も参加し、現場保健師とともにプログラム実施状況の把握と対象者の観察を行い、プログラムとPACSの適用可能性について検討した。このプログラムは子育てにいろいろや不安を持つ対象者向けの子育て支援プログラムで、1クール8回を1年に2クール実施している。内容は臨床心理士・保健師を中心とした自由形式のグループワークである。「ここでの話はここだけにする」、「人の話を批判しない」などのルールを適用し、安心感を持って参加できるよう心がけた。研究者はオブザーバーとしてグループに参加したが、プログラム内容に研究的な介入は行なわなかった。プログラム実施時の観察、実施後のスタッフ間でのカンファレンスの実施、プログラム前後に実施したアンケート結果を通して、参加者それぞれへの効果、質的な変化を中心に検討を行った。

②プログラムの参加者において、プログラムの前後でPACSを含めたアンケート調査を用いて前後の結果を比較した。平成21年度、22年度実施のプログラム参加者それぞれ13名、計26名に対し実施したアンケート調査について、調査の趣旨と匿名性の確保を口頭で説明し了承が得られた人の結果を分析した。分析には対応のあるt検定を用いた。

また、対照群として子育てグループプログラムに参加していない子育てサロン等の参加者を対象としたアンケート調査を実施した。対照群としたのは、B市育児サロンに参加している母親である。まずPACSを組み込んだアンケート調査を64名に配布し62名から回答が得られた。その3ヵ月後(プログラムの実施期間に相当)に再度同じアンケート調査を実施し、2回分の回答が得られた対象者を分析対象とし、前後比較を行うとともにプログラム参加者と比較した。また、尺度のテスト-再テスト法による信頼性の検討にも使用した。

倫理的配慮に関しては、研究代表者の所属機関の倫理委員会に申請したが、「自治体の事業評価の一環として行なわれており非該当」との結果であったため、A市と十分協議した結果、参加者の状況とプライバシーに十分配慮し、研究の趣旨を説明した上で同意を得られた参加者のみをデータとして使用することとした。また、育児サロン参加者に対しては、調査票に調査の趣旨と匿名性の確保などについて記載し、実施前に十分説明を行った後、回答をもって了承を得たとみなした。

## 4. 研究成果

### (1) 養育肯定感尺度 (PACS) の開発

暫定版尺度項目35項目について、平均値および標準偏差、最大値、最小値を算出し、

天井効果、フロア効果、項目内相関を考慮し12項目を除外した。また、G-P分析を行い、すべての項目が暫定尺度の合計得点と適切に対応している項目であることを確認した。

#### ①構成概念妥当性の検討

12項目を除外した23項目について、探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、最終的に3因子、11項目を採用した。PACSの因子間の相関係数は、0.436～0.607までと高い値が得られた。

因子の解釈について、第1因子は、母親が親である自分自身を受け入れ、子育てを行っていることを楽しい、充実しているなど肯定的に捉えて満足している状態と解釈し、「親役割に対する肯定感情」と命名した。

第2因子は、子育てを通じて配偶者や家族との関係がプラスに強化され、そのことを肯定的に捉えている状態と解釈し、「家族関係に対する肯定感情」と命名した。

第3因子は、子育てを通じて自分自身が好きになった、プラス方向に成長した、といった自己を肯定する感情が向上したと感じている状態と解釈し、「自己に対する肯定感情」と命名した。

#### ②基準関連妥当性の検討

PACSと自尊感情尺度、GHQ-12との相関係数を算出した。その結果、中程度の有意な正の相関が確認された( $r=0.456$ ,  $p<0.001$ )。また、GHQ-12との相関は弱い負の相関があった。

#### ③信頼性の検討

PACS得点および下位尺度についての内的整合性を確認するため、Cronbach's  $\alpha$ を算出した。PACS全体では $\alpha=0.855$ 、「親役割に対する肯定感情」は $\alpha=0.835$ 、「家族関係に対する肯定感情」は $\alpha=0.749$ 、「自己に対する肯定感情」は $\alpha=0.779$ と高い値を示した。また、折半法による $\alpha$ は0.812であった。

PACS各項目のI-T相関分析を行ったところ、相関係数は0.475～0.763であった。各項目を除外した場合のCronbach's  $\alpha$ は0.821～0.845であり、尺度全体の $\alpha=0.855$ を超える項目はなかった。

#### ④PACSの項目

PACSの項目の中で、2つの質問が含まれている項目があり回答しにくいことから設問を2つに分けた。その結果、以後PACSは12項目3因子の尺度として使用することとした。

#### (2) 尺度の子育て支援プログラムへの適用とプログラム評価

1年目は子育て支援プログラム開発のための環境整備および対象者の把握を中心に実施した。調査フィールドとしたA市において、

子育て支援プログラムに参加し、事業内容および参加者や実施状況の観察と検討を行った。

観察とアンケート調査により、参加者はおおむねプログラムには満足しており、グループプログラムによって、また同じ立場の参加者との交流を通じてエンパワメントされていること、子育てに対してより肯定的に、前向きに捉えることができるようになっていくことが明らかになった。しかし、これらについての評価は、観察者の主観的な受け止めとアンケートの記述による参加者の感想にとどまっており、効果として測定が不十分であることが課題として浮上した。そこで次年度からプログラム前後に実施しているアンケート項目にPACSを導入し、その測定によって評価を行うこととなった。

2,3年目はアンケート項目に導入したPACS(12項目)を用いてA市における子育てプログラムの参加者における評価を行なった。

平成21年度、22年度実施のプログラム参加者26名であり、すべての参加者より回答が得られたため、有効回答率は100%であった。対照群については、1回目のデータが得られた62名中2回分のデータが得られた27名のうち記載不十分の2名を除外した25名を分析対象者とした。有効回答率は40.3%であった。

プログラム参加者、育児サロン参加者ともすべて母親で平均年齢34.8歳、35.3歳、子どもの数は1.6人、1.3人と有意な差はなかった。また、子どもの年齢、家族形態、仕事の有無についても有意な差は認められなかった。

プログラム参加者におけるPACS得点はプログラム参加前 $38.1\pm 7.9$ 点、参加後は $46.0\pm 5.7$ 点であり、参加後に有意な上昇が見られた。また、いずれの下位尺度においても同様に有意得点の上昇が見られた。

対照群のPACS得点について、1回目は $46.0\pm 6.8$ 点、3ヵ月後には $47.4\pm 5.5$ 点であり、前後の得点に有意差は見られず、ほぼ同じ得点であった。

プログラム参加者と対象群の比較においては、プログラム実施前はプログラム参加者のPACS得点および下位尺度得点すべてが対照群より有意に低かったが、プログラム終了後にはプログラム参加者の得点が上昇しており、両者に有意差は見られなくなった。PACS得点前後の得点差を算出しt検定を行ったところ、プログラム参加者が平均7.9点、育児サロン参加者が0.9点の増加であり、増加量に有意な差が見られた。

プログラム参加者の観察およびアンケート内容の検討から、質的にも母親が育児を前向きに捉えられたり、親としての自分を肯定

的に感じていることが出来ている状況が確認された。また、母親のいらいらや不安感は家族関係や子どもの発育・発達上の問題、母親自身のメンタルの問題など、多くの要因が関係していることが示唆されたが、その中でも月経周期に関係しているという発言が多く聞かれた。その結果、今後のプログラムには、月経周期といらいらに関する情報収集とセルフケアについての情報提供を加えることになった。さらに、月経周期の不快さと養育肯定感との関連についても今後検討していく予定となった。

以上のように、A市における子育て支援プログラムの参加者に養育肯定感情の上昇が認められたことから、この子育て支援プログラムは参加者の養育肯定感情を上昇させることが示唆された。PACS 信頼性・妥当性については、テスト-再テスト法により信頼性が確認され、安定して使用できる尺度であることが示された。また、プログラム後のカンファレンスや参加前後のアンケート結果において、プログラム参加者の質的な変化が PACS の測定結果と一致しており、PACS の妥当性がさらに検証できたと考えられた。よって、子育て支援プログラムの評価ツールとして PACS は活用可能であり、今後の自治体における子育てプログラム評価に貢献できることが示唆された。また、このように一連の評価活動を行うことは今後のプログラムを検討していく上で有益であったことが示された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

①都筑千景、岡本綾子、伊藤典子、橋本美保.  
乳幼児の子を持つ親の養育肯定感尺度の開発. 第 69 回日本公衆衛生学会総会 平成 22 年 10 月 27 日 東京国際フォーラム

②橋本美保、岡本綾子、伊藤典子、都筑千景.  
育児困難感を抱える母親に対するグループ支援プログラムの評価. 第 69 回日本公衆衛生学会総会 平成 22 年 10 月 27 日 東京国際フォーラム

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

都筑 千景 (TSUZUKI CHIKAGE)  
大阪市立大学・大学院看護学研究科・准教授  
研究者番号：00364034

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし